

テキストの主観的解釈は科学的か

高木廣文 東邦大学医学部看護学科長

質的研究の本質再考

すでに第1回目の連載で述べたように(高木, 2009a), あらゆる質的研究に共通する本質は, 研究に関する情報を最終的には「言語化しテキスト化すること」である。そのようにして作成された一連のテキストを研究目的に応じて細分化し, その内容を適切に表わすと考えられる名称を与えるのが(コード化, ラベリングなど), 質的研究での最初の分析といってよいだろう。

このような, 質的研究の最も重要なデータとなる情報の収集方法は, 実際には図1に示したように, ①研究者自身の観察や主観によるデータ, ②情報提供者から得たデータ, の2通りに分けることができる。

参与観察のように研究者が研究現場において, 観察し感じたことをノートに記した情報と, インタビューによってICレコーダーに保存された音声データでは, その本質に大きな違いがある。すなわち, 研究者自身の考えを記した情報は, 自分の判断だけに基づくので, 記された内容の意味の解釈で間違えることは, (実際にはあるかもしれないが)理論上はないはずである。

一方, 研究者が他者から情報を得た場合には, その情報提供者が意図したことと, 受け手である

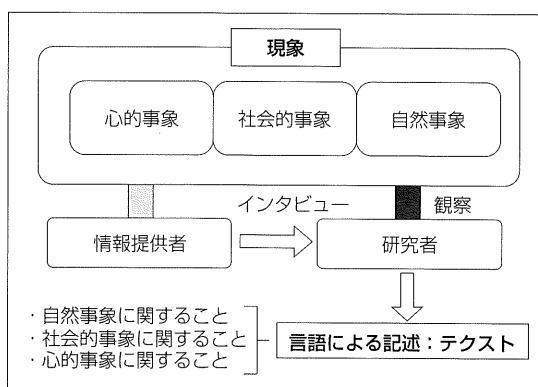


図1 情報収集のプロセスとテキストの分類

研究者が解釈した意味内容が異なることがありうる。さらに, テキストを解釈するということは, 研究者が頭であれこれ考えることで, どんな理由をつけてもどんな方法を用いても, 結局は主観によるものである。量的研究のように, 学部学生でもできるパソコン用の統計学的方法を使えばよいといったものではない。このため, 質的研究の結果に対しては, それが主観によるテキスト解釈に基づくという理由から, 非科学的であるとする量的研究者が多数存在するといってよいだろう。

すでに, 質的研究は構造主義科学論(池田, 1998)や構造構成主義(西條, 2005)の立場からは科学であると説明済みであるが(高木, 2009b), それだけでは批判的な量的研究者は, 納得はしないのではないだろうか。そこで今回は, 信念対立

問題をメタ理論により解消するのではなく、主観的テキスト解釈の方法論の正当性を述べることで、解消できるかを試みる。そのためには、まず主観的解釈とはどういうことなのかという点について考えてみたい。特に、インタビューなどによる情報提供者から得たデータを研究者がテキスト化し、解釈する場合の問題について、考察を加えてみたい。



質的研究への批判とその対応

西條(2005)による構造構成主義に基づけば、我々はリサーチ・クエッションに応じて研究方法を選択すればよいとされる。例えば、仮説「タイのHIV/AIDSとともに生きる人々に対する抗ウイルス(ARV)治療薬の無料配布は、死亡率を激減させた」ということを検証したければ、2003年以降の死亡率の年次推移を調べたり、ある地域でのARV治療薬の配布量と死亡率の相関関係を調べることも可能である。上記のような研究課題には量的研究が適している。一方、よく似てはいるが、仮説「タイのHIV/AIDSとともに生きる人々に対する抗ウイルス(ARV)治療薬の無料配布は、生活の質(QOL)を高めた」ということを検証したい場合はやや面倒である。恐らくQOLを継年的に調べたデータはないだろう。現在の状況に関しては、適当なQOL尺度を用いて、量的に研究を進められるかもしれない。運よく、ARV治療薬の無料配布以前に、QOLを量的に調べた研究があれば比較できるかもしれない。しかし、一般には完全に同じ状況ではないので、他の方法を考えねばならないかもしれない。そのような場合、HIV/AIDSとともに生きる人々にインタビューして、昔の状況といまの状況を聞き取りすることが考えられる。こうなると完全に質的研究の方法論が、研究のためには適切になるだろう。ここまでの議論は、構造構成主義でなくとも問題はないと考えられる。

それ以外に、リサーチ・クエッションに対して適切な研究方法がないののだが、質的研究を行なうと次のようなことをいわれるかもしれない。「あなたが情報提供者に選んだHIV/AIDSとともに生きる人々は、母集団を代表しているのですか」または「情報提供者の選択にバイアスがあるのではないですか」「そんなに少数の情報提供者でいいのですか」「インタビューの内容の解釈は正しいのですか」「主観的な解釈では科学といえないのではないですか」「結果は一般化できるのですか」等々、ちょっと考えただけでたくさん出てくる。

こういった批判は、私自身が長らく生粋の量的研究者として研究を行なってきたのでよく理解できる。しかし、批判される側は、質的研究以外に採用すべき方法論がないにもかかわらず、そのような批判を受けるのは極めて不本意な思いなのではないだろうか。

構造構成主義の理路は正しいと思うのだが、そもそも量的研究者は構造構成主義の考え方に興味をもつことはほとんどないし、説明したところでもともと聞く気がないのだから、理解させるのも難しいのではないだろうか。いわゆる「バカの壁」であるが、どうすれば納得させることができるのだろうか。

1つは、すでに説明したように、構造主義科学論に基づけば、質的研究も量的研究同様に科学的な理論やモデルをもたらしることができることを地道に説明することである(高木, 2009b)。しかし、これだけでは相互理解への道は遠いだろう。

もう1つは、かなり面倒ではあるが、質的研究の本質である「テキストの研究者の主観に基づく解釈」が、自分勝手な解釈方法ではなく、実は普遍的な結果をもたらしうる基盤に基づいていることを説明することである。そのようなことが果たしてできるのか、我々が用いている「言語」について、現象学的にまた科学的に考えてみたいと思う。



ソシュールの一般言語学

Saussure(ソシュール, 1857-1913)はスイスの言語学者であり、はじめて科学的なパラダイムを言語学に取り入れた人物といってよいだろう。ソシュールは、1906年から1911年にかけて、ジュネーブ大学で一般言語学の講義を行っていたのだが、その内容を論文や書物にせず亡くなってしまった。しかし、ソシュールの弟子のバイイとセシュエが、本人たちは出席しなかったにもかかわらず、この講義に出席した学生たちの講義ノートをもとに適当にまとめ、自分たちの考えで解釈し、ソシュールの『一般言語学講義』として出版した。日本では、1928(昭和3)年にいち早く小林英夫により翻訳された。しかし、もともとソシュールの手による本ではなく、授業も受けていない者の解釈による言語論であるため、誤解と歪曲に満ちていると、丸山(1981, 1983)は指摘している。とはいえ、思想的な影響は極めて大きかったのも事実である。最近になってやっと、第3回講義にすべて出席し、精緻な講義ノートを残していたコンスタンタン(Constantin)が書いたノートをもとにした一般言語学の講義録が出版され(Saussure／相原・秋津訳, 2003)、かなりの誤解が払拭されたのではないかと考えられる。

それでは、ソシュールの一般言語学とは、どのようなものであったのか、その主要な概念のみを簡単に説明しよう。これについては、すでに前回簡単に説明しているし(高木, 2009b)、昨年(2009)の日本看護科学学会のランチョンセミナーでも説明しているが(高木, 2009c)、重要な点なので再度説明しよう。

図2は、「リンゴ」という言葉がどのように構成されているかを示したものである。人間は、それぞれが属する文化内で単一の言語を話したり書いたりしている。ソシュールは、それを「ラング; langue」と呼んだ。日本では「日本語」が、英国では「英語」が使われているように、個別の言語がラ

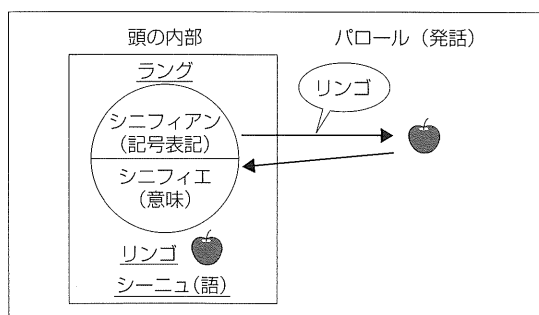


図2 言葉とラングの構造

ングである。

さて、素朴な質問として「日本語はどこにあるのだろうか?」と問われたらどのように答えるだろうか。「本のなか?」それとも「日本語の辞書のなかにある?」なんとなくそう答えたいくなるが、実際のところ、日本語は我々日本人の頭のなかにあるのである。我々は、生まれるとすぐに母親や父親からさまざまな言葉で話しかけられる。実際の音声としての言語は「パロール; parole」と呼ばれ、この反復によって、いつしか、我々の脳内に言葉を使用するためのネットワークシステムがつくりあげられるものと考えられる。すなわち、日本語のような言語は、「個々人の脳内にラングとしてシステムが構築される」のである。

このように構成されたラングのシステムの要素である言葉(シーニュ; signe)は、興味深い特質をもっている。例えば日本語で「リンゴ」と聞くと、我々は「果物の一種で、赤くて、甘ずっぱい食べ物」のように思うだろう。このように、言葉は音声や記号標記の部分(シニフィアン; signifiant)とその意味(シニフィエ; signifie)の両面から構成されている。

ラングに関して、①ラングは恣意的である、②ラングは差のみである、③ラングは否定的である、という特徴が指摘されている。

①については、「ネコ」(日本語)が「cat」(英語)になったり「meo」(タイ語)だったりと言語によって異なるので、それが恣意的、すなわち何の根拠もなくそうなっていることは理解できると思う。ただ、ラングは一定の文化のなかでパロール(発

話)によって通用しているため、勝手に「ネコ」を「ふんふん」と呼んでも本人以外は通用しないので、恣意的といっても社会のなかで決まるという制限はある。すなわち、④ラングは社会的にパロールによって構成されている、といえる。

ラングを構成する個々の言葉(シーニュ)の音声表記や記号表記であるシニフィアンは恣意的であるが、実はその意味であるシニフィエも、必ずしもきっちりとその意味が決まっているわけではない。シニフィアンが恣意的なのは納得できるが、「ネコ」や「イヌ」が、猫や犬以外の何を示すというのだろうか。例えば、「不安」や「希望」などの抽象的な言葉のもつ意味が不明確なのは比較的理解が得やすいだろうが、実在の動物と考えられるものがそうではないとは、おかしな考えに思えるかもしれない。

これは、前回説明したように(高木, 2009b), ものの名称についての唯名論の立場を考えると理解できるだろう。すなわち、「ネコ」という名称は、よく似た特徴を有する小動物の総称名であり、社会や地域によって、同じ意味のように見えても、実際は山猫のような小動物を含める社会もあれば、そうでない社会もあり、それがラングに反映される。

「虹」という言葉の例でよく知られているように、日本人は「虹」というとすぐに「7色」と思うが、欧米では「rainbow」は「6色」だし、他の社会で「2色」ということもある。こうなると、同じ現象を見ているつもりでも、我々はそれぞれのラングを通じて、世界を「別々の固有の世界」として分節して見ていることになるだろう。このように考えてみると、我々の言葉が通じることが、極めて不思議に思えてこないだろうか。



言葉の多義性と会話の信憑構造

個々の言葉であるシーニュが恣意的であり、パロールが社会的な存在だとしても、ラングが個々

人の脳内に独立に構築されるシステムならば、我々は他者との会話で、相手のいうことの意味が本当にわかっているのだろうかという疑問が生じてくる。

例えば、「いい天気だね」といわれたとき、これはどのような意味をもつのだろうか。普通は、単純に、現在の天気がいいことを述べていると考えられるが、「いい天気だから、どこかに遊びに行こう」と誘っているとも解釈できる。または、「いい天気だから、どこかに連れていけ」と催促、命令しているのかもしれない。もしかすると、恋人と別れたばかりで、真意は「でも、私の心のなかには土砂降りだ!」といたいのかかもしれない。

このように単純な会話であっても、そのもつ意味は多義的である。そう考えると、本当に我々は相手のいっていることの意味を、正しく理解していると考えてよいのだろうかという疑問は、ますます強くなってくる。言葉のもつ本質的な恣意性からいっても、我々の会話は、単なる思い込みの連続によって支えられているのだろうか。

こういった疑問について、竹田(2001, p.128)は会話の信憑構造という考えを示し(図3)、会話におけるこのような問題を、①認識問題、および、②意味理解の問題、に分けている。

①の認識問題とは、ある事柄について発言しようとした場合、発言者(図3の「発語主体」)が正しく発語し、相手(図3の「受語主体」)に伝えることができたと自分が認識できるかという問題である。「水が飲みたい」のならば「お湯ではなく、水が飲みたいこと」を相手に伝えねばならないし、「Aという映画を観たい」のならば、「Bではなく、Aという映画を観たいこと」を伝えねばならない。すなわち、自分の発言が、自分の意思の通りに相手に伝わったと確信がもてるかどうかという問題である。

②の意味理解の問題とは、聞き手が発言者のいったこと(図3の「言語表現」)を正しく理解できたと確信がもてるかという問題である。発言通りに受け取ればよい場合、このようなことはあまり問題にならないかもしれない。例えば、「お腹が

人の脳内のラングの構造についての仮定が必要がある。この点については、すでに指摘しているが(高木, 2007), 以下にやや詳細に説明しよう。まず, 以下のような仮定が, テキスト解釈で必要とされるだろう。すなわち,

- 1) ラングはパロールにより社会的に構成されている。
- 2) 同一社会内の個人のラングの構造は同一もしくは同型である。
- 3) ある現象に関しての認識構造は両者(情報提供者と研究者)で同一もしくは同型である。

さらに, 池田(1998, pp.93-94)が指摘するように,

- 4) 同一のラングをもつ個人は, ラング以外の内部世界においても, 同一構造をもつに違いない(暗黙の前提)。

これらの仮定が成り立てば, 我々は言語のもつ多義性の問題をかなりクリアすることができるものと考えられる。

しかし, 本当にラングは各人の頭脳で同型, もしくは同一のシステムとして構築されているのだろうか。我々は脳のなかを自由にみることができないので, いまのところ証明は不可能である。しかし,

- 1) 情報提供者と研究者の間で会話が正しく成り立つように思われる。
- 2) 真善美に対する価値観に違いがないように思われる。
- 3) 喜怒哀楽などの感情面での違いがないように思われる。

といった点から, 間接的にはあるが, 同一のラングを用いる人々のなかでは, 個々人のラングの構造の同型/同一性の仮定は成り立つのではないかと考えられるだろう。

もう1つの傍証は, 質的研究の結果に対して, 「そんなことはわかっている」という, よくある批判の存在である。質的研究の結果に対して, なぜそのような批判ができるのだろうか。このような批判は, 量的研究者と質的研究者のパラダイムの相違に, その原因を求めがちである。しかし, そ

れだけではなく, 質的研究にとってより本質的な問題であるテキスト解釈におけるコード化やコアカテゴリの抽出などに, 密接に関連しているものと考えられる。

例えば, タイのHIV/AIDSとともに生きる人々を情報提供者として, 自分がHIV/AIDSに感染していることをはじめて知ったときの心的な衝撃を知ることを目的に, インタビューを実施したものとしよう。タイのように日本とは異なる文化をもっている国でさえ, 実際に調査をしなくても, 得られる結果についてはおおよその見当はつくだろう。例えば, 「自己の死への恐れ」「社会的差別への危惧」「子どもの将来への不安」「配偶者への怒り」などの概念が抽出されるのではないかと思いつくのではないだろうか。実際にインタビューしてみると, こういった概念がインタビューから確かに抽出される。

このように, 調査をせずとも, ある程度の予想がつくということは, 「常識としてその概念が社会的に存在する」ことを示しているものと考えられる。すなわち, その社会に所属する人たちの認識構造が, その現象については同一か同型であるために, 予測が可能になると考えることができるだろう。

したがって, 「そんなことはわかっている。あたりまえだ」という批判の存在は, 社会的にみて, 多くの人の認識構造の同一性/同型性の証拠ではないかと考えられる。もっとも, すべての概念があらかじめ予測がつくわけではない。個々人の経験の相違により, 特定の現象に関しての認識には差があるのが普通だろうと思われる。それらの相違を上手く抽出し, モデル化することが質的研究の意義ではないかと考えられる。



言語は生得的なのか

日本語のようなラングが, 個々人の頭脳のなかで同一か同型の構造をしているというのは, いま

のところ直接的には証明が不可能な仮説であるが、テキスト解釈に関しては極めて重要な仮説でもある。すでに、言語学の分野にはこの仮説を強力に支持する極めて強力な学説が存在する。

子どもが言語を獲得する過程に関しては、いくつかの疑問があり、「プラトンの問題」として知られている。すなわち、「人間は、世界との接触が短く、個人的で限られたものであるにもかかわらず、かくも多くのことを知りうるのは、どのようにして可能なのか」という問題であり、言葉についての「刺激の欠乏の問題」の1つである(Chomsky, 1987/加藤・加藤, 2004, p.41)。子どもが生まれてから経験する言語のデータは、必ずしも完全なものではなく、不備がある。しかも、いつも正確な言語を親や周囲から聞くわけではない。つまり、経験する言語の刺激は貧困なのに、生後5年程度で獲得される言語は完全であるという事実はどうしてなのかということである。

また、①人間ならば誰でも母語を獲得できる、②人間と同じ仕組みの言語を獲得できるのは人間以外の動物にはいない(町田, 2006, p.187)という事実がある。

さらに、「離散無限性の概念」が教えられなくともわかっている(Chomsky, 1982, 2002/福井・辻子訳, 2003, pp.68-78)。つまり、 $1+1=2$, $2+1=3$ のように教えれば、これが無限に続くことを、我々はすぐに理解できる。つまり子どもであっても、 $100+1=101$ 、が最後だなどとは考えない。これは数字の離散無限性の例であるが、言語も同じである。例えば、「……」「[[それは夢だと思った]と夢のなかで思った]と夢のなかで思った]と夢のなかで思った]……」のように、いくらでも無限に入れ子構造の文を考えることができることを知っている。

我々の知っている言葉は有限であるが、そこからこのようにして無限の文を構成することが可能である。このようなことは、誰かに教わって理解しているのではなく、子どものときに母語を覚えながら無意識に理解していることである。

なぜ、人は教えられていないのに、不完全な会

話のなかから、完全なラングを構成できるのだろうか。この問いに対するプラトンの答えは、「我々は前世からの記憶があるので多くのことを知っているのだ」というものだった(Chomsky, 1987/加藤・加藤, 2004, p.42)。この解答は、反証が不可能なので、科学的な理論として受け入れるわけにはいかない。しかし、答えとしてはかなりの的を射たものである。

それでは、プラトンの解答をどのように変えれば科学的な仮説として受け入れられるのであろうか。Chomsky(1987/加藤・加藤, 2004, p.42)は、「この仮定を現代の言葉で言い換えると、知識、信条、理解などの認知システムは、遺伝的資質によって決められた形で発達する」と指摘している。これは、人間は生まれながらにして、脳の構造として言語のための文法システムをもっているという仮説に結びつく。また、人間は日本人の子どもでも米国で育てば英語を母語にするし、逆も成り立つ。したがって、人間の脳内の言語システムは、そのような異なる文法にも対応するようなシステムでなくてはならない。このような心・脳の文法の初期状態(生まれたての状態)を「普遍文法; universal grammar」と呼び、ある特定の定常状態(ある言語を母語として獲得した状態)を「個別文法」(日本語や英語などの文法)と呼ぶ(Chomsky, 2002/大石・豊島訳, 2008, pp.8-9)。

このような普遍文法が、実際に我々の心・脳に存在しているのかという問題は、さまざまな言語で研究されている。その詳細については本書の目的とするところではないが、極めて興味深い理論であることは間違いないだろう。

しかし、これに対して批判がないわけではない。すなわち、チョムスキーの普遍文法に関して、「深層構造」(発話や言葉として表面化していない状態。表面化したものは、「表層構造」)がすべての言語で同一であるという仮定には異論がある。田中(2000)は、チョムスキーが英語のみをもとに、全言語に共通する深層構造における普遍文法の存在を仮定することは、一種の英語帝国主義とユダヤ的普遍主義によるイデオロギーに基づくも

のとして、かなり激しい疑義を述べている。

ただし子どもが、普通はわずか5年程度で完全な文法をつくりあげるのであれば、生まれつき頭のなかに普遍文法が組み込まれていなければならないと考えなければならない(町田, 2006, pp.183-184)ということも、大きく間違った主張ではないように思われる。

仮に、人間の心・脳構造に関する普遍文法が存在するのなら、我々の認識や思考はその心・脳システムによって生み出されているので、前述した「ラングの同一性/同型性の仮定」が成り立つものと考えてもよいことになるだろう。そうだとすれば、主観的なテキスト解釈とされていた「主観」が、すべての人類の心・脳構造に「共通する言語システムに基づく主観」であることになる。すなわち、テキスト解釈は全人類に共通する心・脳システムとしての言語システムを用いて行なう、極めて共通理解が可能なツールに基づいていることになる。したがって、テキスト解釈は上手くやれば、誰が解釈してもかなり再現性のある結果を与えることができるだろう。再現性は科学的研究の特性であり、再現性が担保できるのならば、質的研究も理論的には科学的な結果を与えることができることになる。

の原理。北大路書房。

- 池田清彦(1998). 構造主義科学論の冒険. 講談社学術文庫, 講談社.
- 竹田青嗣(2001). 言語的思考へ—脱構築と現象学. 径書房.
- 丸山圭三郎(1981). ソシュールの思想. 岩波書店, 1981.
- 丸山圭三郎(1983). ソシュールを読む. 岩波書店, 1983.
- Chomsky, N., Belletti, A., & Rizzi, L.(2002). *On Nature and Language*. Press Syndicate of the University of Cambridge. /大石正幸, 豊島孝之訳(2008). 自然と言語. 研究社.
- Chomsky, N.(1987). *Language in a Psychological Setting*. Sophia University. /加藤泰彦, 加藤ナツ子訳(2004). 言語と認知—心的存在としての言語. 秀英書房.
- Chomsky, N.(1982, 2002). *The Generative Enterprise*. Mouton de Gruyter. /福井直樹, 辻子美保子訳(2003). 生成文法の企て. 岩波書店.
- Saussure, F. *Troisieme Cours de Linguistique Generale (1910-1911)*, (d'après les chaires d'Emile Constantin) /相原奈津江, 秋津伶訳(2003). フェルデナン・ド・ソシュール一般言語学第三回講義—エミール・コンスタンタンによる講義記録. エディット・バルク.
- 高木廣文(2007). 質的研究は科学としてエビデンスをもたらすか. 看護学雑誌, 71 (8), 712-715.
- 高木廣文(2009a). 質的研究とはどんな研究なのか—量的研究と質的研究. 看護研究, 42 (1), 69-74.
- 高木廣文(2009b). 構造主義科学論の考え方. 看護研究, 42 (2), 145-152.
- 高木廣文, 萱間真美(2009c). 1事例の質的研究でも科学的か? —質的研究による少数例の科学的エビデンス. 看護研究, 42 (2), 131-143.
- 田中克彦(2000). チョムスキー. 岩波書店.
- 町田健(2006). チョムスキー入門—生成文法の謎を解く. 光文社新書, 光文社.

参考文献

- 西條剛央(2005). 構造構成主義とは何か—一次世代人間科学

たかぎひろふみ ● 東邦大学医学部看護学科

〒143-0015 東京都大田区大森西 4-16-20

NURSING BOOK INFORMATION

医学書院

ナースのための統計学 第2版

高木廣文

- B5 頁228 2009年
定価2,310円(本体2,200円+税5%)
[ISBN978-4-260-00772-6]

発売以来、25年を経た現在でも多くの読者が求めるロングセラーをリニューアル。判型を大きくし、2色刷りにしたことで、より見やすく、より使いやすくなった。x, y, Σといった記号はできるかぎり使わずに日本語で解説していることで、わかりやすさは前版と同様。統計学が苦手な方に、ぜひ手にとってもらいたい1冊。